こうして一年間を通してながめて来ると、かいたりつくったりすることの能力の伸張も幼児の時期の著るしさに今更ながら驚くとともに、社会性の発達が協同作業などの支えとなって協力の心を育んでいるのに気づき、その芽ばえを五才児になったらもっと適切に伸ばして行きたいと願うのであった。また昨年度は四才児として、絵画製作材料に一わたりふれてきたが、その興味を増し、幼児のつくりたいかきたい意欲を高めるためにも、それらについても今後いっそう検討していきたいと思うのである。

五才児

村井　トミ

＊　＊

五才児ともなると、心身共に著しい発表をみせてくれる。絵画製作に限らず、過去の一年ないし二年の生活経験が土台となって、三才、四才とは違って盛りあがるような勢をみせてくれる。鬼ごっこにしても、かけっこにしても真剣にやらなければ追い越されてしまう。打てば響く—と言えば大げさかもしれないが、やりがいのある楽しさを感じさせる。それだけにこちらの保育の運転の仕方に責任があり恐ろしいとも言える。今、自分の運転してきた道を、おそるおそるふり返って俎上にのせてみよう。

一口に絵画製作といっても、絵画は主として自分の心持を自由に表現する。描くということが中心であろうが、製作は自己表現と同時に或る目的をもってつくることの両方の要素を含んでいる。そこで、いろいろの分類の仕方もあろうが、平凡に、心象的表現を代表するかくことと、目的表現を代表するつくることの二つに分けて考えてみたい。

更に急に五才児はどうかといっても、入園当時から連ってのことであるし、三才、四才時代にどういう方針で進んできたか、を記さなければならないことになろう。

かくこと

・三、四才では何でも自分のかきたいものを自由にかかせることを中心としてきた。主題を与えたり、みて描いたりというような束縛は全くしなかった。自由にかく機会を充分にあたえた。たのしんで描くかどうかということが第一だった。

・環境は豊富にと充分に気をつけた。おたまじゃくしを飼いはじめた頃、ひとりでに、おたまじゃくしの絵を嬉しそうに描いているのには、今更ながら驚ろかされた。おたまじゃくしの絵はこの時の子どもたちには、ニューフェイスだったからだ。こんなにも直接に効果があらわれるとは思わなかった。

・錯画の長く続く子どもに対して、特に親達は非常に心配をする。あまり長いとこちらまで少々気になり出すが、気にしないでつとめて自然にまかせるようにした。気がせいて、自動車や花の描き方を教えられたら一大事である。親の指導に努力がいる。

・与える材料は色をかえ、質をかえ、趣向をかえて興味をもって入ってくるように工夫をした。子どもは「珍らしがりや」とよく言われるが、ちょっとした変化でも珍らしがって寄ってくる。珍らしがりやであってこそ進歩があるというものかもしれな

い。ただ一つ忘れてならないのは、適材を適所に（年令に応じて）使うということである。大きい紙に描かせた方がよいからといって、あの小さい三才児に思いきって大きな紙を与えたところでどうであろう。必要ならば大地でも、ボールドにでも砂場にでも、更に日頃の遊びにも大筋肉を働かす機会はいくらもあるであろう。

・一人ひとりをよく見つめて、助言やはげましをあたえ、自信をつけてやることを忘れないように努力した。

前記のような方向で、内容の差こそあれ、三才、四才を過ごしてきて、五才にもなると生活環境が豊富になり、驚ろく程よく描けるようになってくる。友達と一しょに描いたり、相談して一つのまとまった物語や、遠足の経験などを紙芝居に描いたりできるようになる。これは描くことの技術的進歩と、更に話しあうこと、意見をのべあうことなど綜合された進歩が子どもたちをそうさせたことであろう。相当大きいものもこなせるし、反対に細いこともできるようになってくる。材料もできるだけ種々のものを使わせるようにしてきた。

形態としては、入園当時は別として（管理の関係上）通常はグループ指導をとってきた。一日の生活の中で、音楽リズム、言語など他の面では一斎の場が多いので、絵画製作だけは指導面からいっても、グループ指導が望ましいと思われた。

こうやって記してくると、五才になると何も問題なくよくできるようになる、と受けとれるかもしれない。しかしこれは三年間を縦に見た眼であり、たしかにくらべものにならない程の大きな発展をなしとげるのであるが、一人ひとりに眼をみはると毎日の保育は、さまざまな問題にぶつかるのである。どうも、描きたがらない子どももいる。友達のまねばかりして創造性のない子もいる。十人十色とはよく言ったもの。

私は私なりの処方箋をつくって診療しているが果してどうなのか、もっともっと勉強したい。

・かきたがらない子どもには一斉にさせればいやおうなしに描くであろうが、そんな外見的な荒療治はいやである。描きたがらないシコリはどこにあるのか、家庭などおとなの欲求が大きすぎるのではないのか、友達に対しての劣等感は？　何かの原因を探求すると共に、改たまって描くという場でなく、自然の場、―例えば土の上に棒きれで描いて遊んだり、庭の一隅に台でも出して、ままごとあそびの中にとり入れたり―何かスムースに入れるような場をもうけて、何度か無駄かもしれない工夫をしてみなければならない。

・同じ絵ばかり描く子にも、また、あの絵かという眼で見ないで、永い眼でみてやろうと思う。同じようでも、どこか少しずつ違ったものが、また新しくつけ加わったものが、いつか出てくる。このチャンスを見逃さずほめてやりたい。このチャンスが秘訣ではないのかと思う。

・人のまねばかりで創造性のない子どもに対しては、まねても描かないよりはよいと言うつもりで向かっていく。卒業までまねばかりしていない。何かのきっかけで自分のものも描くようになる。このきっかけを早く見出してやるのが私の役目と思っている。

これらの問題をもった子どもたちに対して、本当に困った子と顔をしかめず温かい気持で包んでやることが、難しいことだが大切な心構えではなかろうか。

級の中を横に批判せず、子どもたち一人ひとりの縦の成長を心から願い、よろこびたい。

つくること

つくることに対しても意見はいろいろあろう。三才の最初から、白紙より創造させよという意見があるかと思うと、それは無理というもの、模倣の後に創造的に扱った方がよいなど―。何事によらず新説が出ると一方に割り切ろうとするのが人の心であろうかと、しみじみ思うこともあるが、私はどちらもそれぞれいい点を持っているので、中庸をとりたいと思う。模倣なら模倣一点ばりをするから創造性は生み出されないのであって、適当な時に両方をとり入れていけば一番よいのではないかと思っている。勿論扱う時期ということが大きな問題となるわけである。

入園間もない子に白い紙を与えて、何かつくってごらんなさいと言っても、うまくのってこないだろうし、五才児に印刷した線の通りに、十人一様のものをつくっても能のないこと。年少の時には印刷したものを用いても、そのどこかに自由につくる分野を残しておけばよいのではなかろうか。例えば線に従って花かごが出来たにしても、その中にさす花は、自分で自由につくるというように……。お誕生会のお菓子入れにしても四隅に鋏を入れてはれば、箱になるということが、自然に理解できれば、あとは白紙を与えても自分でしようとする衝動が起る。切り方により或る時は細長いカゴに、或る時は四角く、或る時は深いカゴに出来上るであろうし、ここでこそ喜びも困惑もあり、種々の経験を積み、工夫も湧くのであろうと思う。この場合には、はじめの線は、道を明るくする為の一筋の光とも言えよう。このような方向で進んでくると、五才の頃には全く白紙から、ボール紙から、空箱からと言うように最初から自分達で考え、グループで相談しあって工夫するようになる。材料は描く所でも記したと同様、さまざまの経験をさせたいし、大きいダンボールの箱、木片、毛糸、罐、わらなど適当なものを充分に生かして使わせたい。ただ、これも大切なことは、どの程度かという程度である。何流かの生花のように、何でもかんでもくっつけて、（聞いても本人も何が出来たかわからない）マチス風の製作に至っては、行き過ぎと言いたくなる。倉橋惣三氏の著書の中に、保育にも中庸の大切さをのべられていたのを思い出す。

環境をつくるとか助言をするなど「描くこと」と同様であるし今更のべないことに

する。

× × × ×

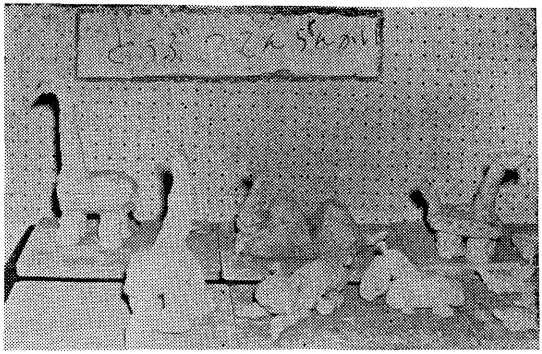
「動物園ごっこ」の思い出

五才児の二学期

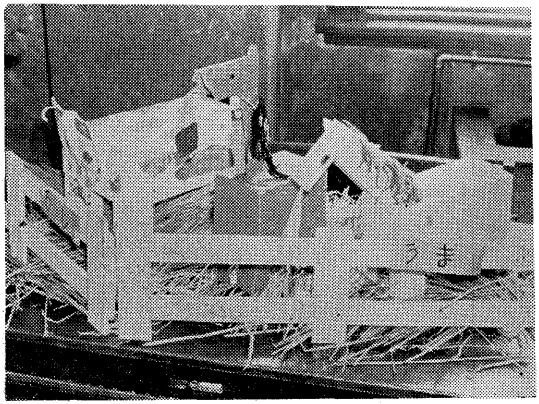
・導入、動物園に遠足に行き、翌日から皆で「私たちの動物園」をつくることにした。先ず細長い障子紙に、ひとりずつ好きな動物を絵の具で描いた。36匹の動物の行列である。室の壁面に飾っておいた。

・相談。見た動物の中で何をつくろうかという相談になった。ラクダ、虎、ライオン、象、キリン、兎など20種位つくることに決め、その中で三つずつ、つくりたいものを選んで受け持つことにした。おもしろいことに、りす、兎、へび、キリンの希望が一番多かった。小鳥や水族館などは皆でつくることにした。

・動物つくり。大体三人から六、七人のグループにまとまり、材料あつめが始った。大きい動物は大きい箱、小さい動物はバターの箱やマッチの箱、のりの罐から、ハタキの棒まで毎日のように動物つくりに必要な箱や材料を風呂敷にかかえて来る姿は、本当にやろうとする希望や意欲に燃えて、かわいらしかった。室の広さの関係もあり、一日に三種類位ずつ手をつけていった。なるべく子ども達に考えさせ、首のつけ根や、不安定の所など一緒に考えた。子ども達は実行家であり、考えついたことをどんどん実行に移していく。おとなのように失敗したらたいへんと、ためらったりはしていない。ここでもおとなの私は随分教えられた。また教師自身、これらの事が好きであり、おもしろい思いつきなど充分に浮かぶようでなければいけないと思う。億劫がっては出来ないことだ。



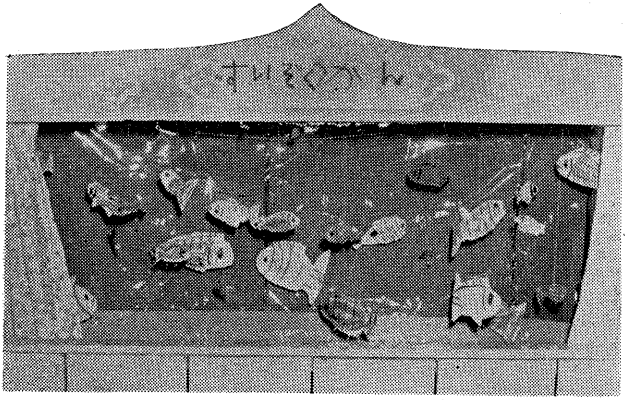
ラクダ・馬・牛・ライオン・虎・キリン・熊などは、二、三人で組んで一匹ずつこしらえていったし、猿やカンガルー・豚のようなものは、バターの箱を体にして、手足をつけひとりで一つずつ、つくっていた。カンガル

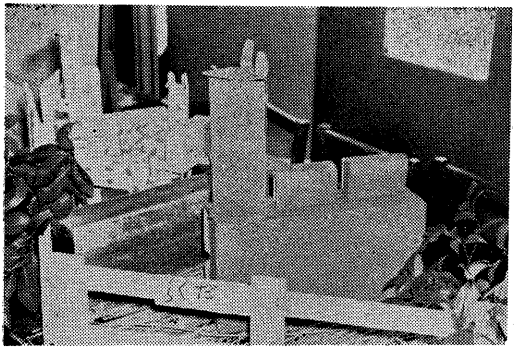


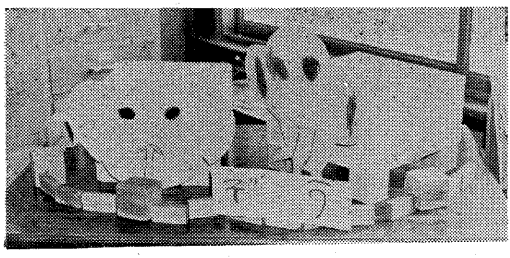
ーのお腹の袋や、赤ちゃんなど、それぞれによく考えたものだ。虎や豚は、古い免状の筒や、クレンザーの円筒で、牛馬のたてがみや尾は毛糸で、山羊は古い編物をほぐしたフルブルの毛糸をはりつけて愉快だった。毛糸をほぐすのにも皆夢中だったのを思い出す。兎は調味料詰め合わせの空箱がちょうどアパートの窓のようなので、わらを敷いてその中に入れた。お茶の入っていた細い袋は、紙くずを入れて、りすの太いしっぽとなり感じが出ていた。また粘土も充分に使って動物をこしらえ、動物展示場も、もうけた。他の組の分までかりて思いきってたくさん与えた粘土で、次次にすばらしいのが出来た時には、本当にうれしかった。木工の動物をつくりたかったが、時間の関係で中止し残念だった。

この頃、毎日が楽しみであり、子ども達も張り切って登園した。自分の番でなくとも、いい思いつきは報告に来てくれる。

・いよいよ会場つくり、大小の積木・わり箸・粘土・ままごとの柵などで囲をし、わらを敷いたり、小舎に木箱を利用したり、金網







の衝立を立てたり、水族館に人形芝居の舞台を利用するなど、室の中を見まわしても、思いつきによっては相当おもしろく応用できるというもの。

・入場券つくりも、入場料を、大人20円、小人10円ときめてくれた。一枚一枚に金額と動物の絵をかいた。幼稚園のお友達と、お母様達がお客様だ。200枚の入場券もあっという間に出来上ってしまった。私は切りとり線を入れる役目、その晩は心たのしくミシンを入れた。本当の切符のようだ。子どもたちが、どんなに喜ぶかと思うと胸が躍った。

・入場券を売る人、切符を切る人、腕章をつけて案内する係、各動物の横にいる世話係、粘土の展示物に、さわらぬよう注意する人、入場者に〝生まれたこのヒヨコさしあげます〟とサービスする子、など皆はり切っている。

お子様は午前中、お母様方は一時から、お迎え前の30分を利用して来ていただく。本当の動物園みたいと言われて皆御満悦のようだった。ちょうど参観に見えた外人の方が、本当のお金を出してヒヨコを買われようとしたのには大笑してしまった。

・数日後、動物に番号をつけてくじ引をした。さあ何が当るかしら、楽しみ！当った番号の動物を大切そうに風呂敷に包んで家に持ち帰った姿を今も忘れられない。

半年も前に過ぎたあの頃を、今更なつかしく思い出す。この子ども達は今は新入の一年生、はり切ってやってくれますように……。私の夢と願いは果てしなく続く——。

× × ×